

寄稿

第6回日本老年薬学会学術大会 優秀演題賞受賞者 インタビュー

受賞者：静岡県立大学大学院薬学研究院薬食研究推進センター 山田静雄
インタビュアー：日本老年薬学会雑誌編集委員会

・研究のきっかけを教えてください。

私は薬学部で薬理学と薬物動態学を専攻し、主に排尿障害治療薬の受容体結合動態解析から薬剤の作用機序の解明や創薬研究に長年従事してきた。現在の高齢者薬物治療において、①多剤併用による抗コリン性有害事象が問題となっている、②抗コリン薬として分類されない薬剤で抗コリン作用を示すものが多い、③抗コリン作用は認知機能低下を惹起する、④海外では抗コリン負荷スコアが開発されているが本邦の薬剤に適用できるものは少ない、などの理由が本研究に着手した契機である。



・知りたかったこと、明らかにしたかったことは何ですか。

本邦において高齢者の多剤併用による抗コリン性有害事象の発現リスクを低減するためには、患者の服用薬剤の抗コリン負荷を定量化できる日本版抗コリン負荷スコアの開発が急務であると考えた。私が専門としてきた薬剤の受容体結合動態の視点から、特異的標識リガンドを用いる簡便な受容体結合測定法を応用して薬理的エビデンスに基づく日本版抗コリン負荷スコアを開発し、患者の抗コリン負荷総スコアを算出することにより、多剤併用による有害事象の発現予測と回避、さらには減薬などに寄与できると考えた。

・最も伝えたかったことを教えてください。

①高齢者に頻用される260薬剤のうち96剤が抗コリン活性を有し、その強度によりスコア1, 2, 3に分類できた。②臨床量の薬剤を服用した場合の最高血漿中濃度(Cmax)を考慮した分類では32剤において抗コリン活性が最も強いスコア3を示すことが分かった。これより多剤併用患者の処方薬剤の抗コリン負荷総スコア算出によって、抗コリン性有害事象の発現予測、回避や減薬に応用できる可能性を提示できた。

・苦労した点はどこですか。

薬理的および薬物動態学的視点から、多くの薬剤を

用いて抗コリン負荷スコアを簡便かつ正確に評価できる手法の考案や、in vitro 実験で得られた薬剤の抗コリン活性と服用患者における有害事象発現との関連性の検証などが苦労した点である。後者については、薬剤服用時の血漿中薬物濃度から予測できる可能性を提示した。今後の課題として、本研究で得られた抗コリン負荷スコアと臨床における有害事象発現との関連性、服用後に活性代謝物が生成される薬剤では活性代謝物の抗コリン活性の評価、薬剤の組織内濃度を考慮した評価などが考えられる。

・今後の目標を教えてください。

今回開発した抗コリン負荷スコアを用いて、多剤併用高齢者における有害事象の発現予測と回避や減薬のための有用性を検証すること、さらに薬剤の有害事象予測精度が高いバージョンアップしたスコアの開発を考えている。

・日本老年薬学会に期待することは何でしょうか。

世界に先駆けて超高齢社会に突入したわが国において、他国の範となる「高齢者のための適正な薬物治療ガイドライン」の構築は世界が注目するところである。医学と薬学などの医療専門家が集う本学会への期待は大きいと確信している。